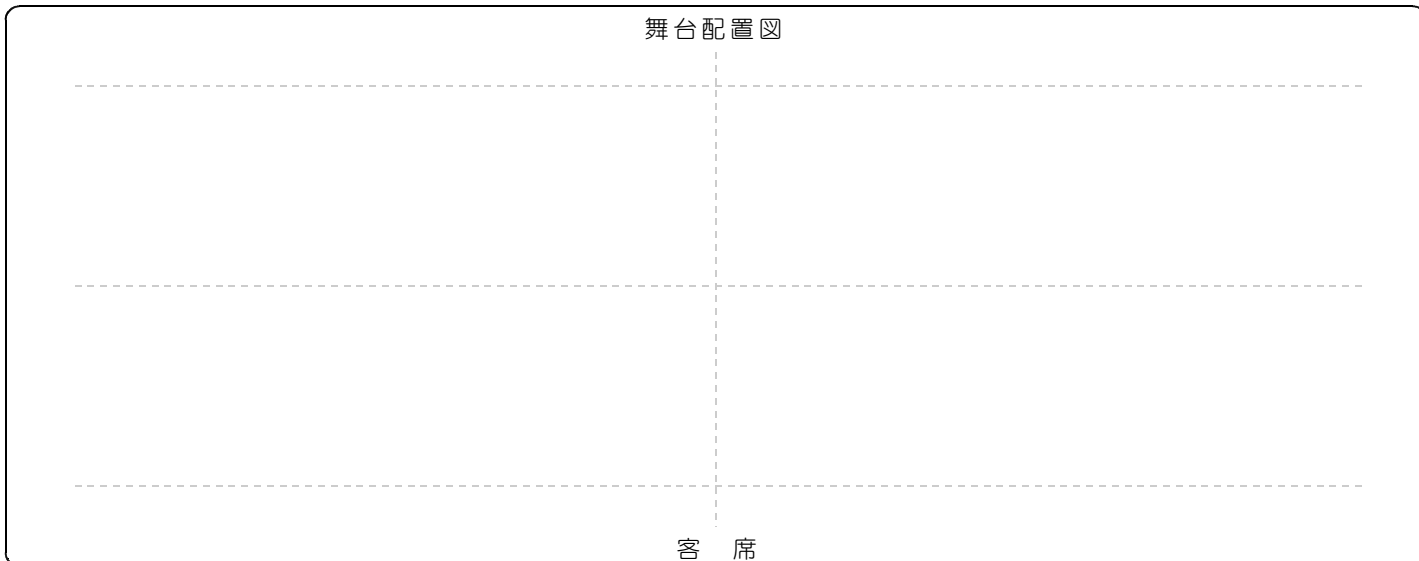


No.	<b>三 絛 遊 奏</b>	演奏者数	演奏時間
-----	----------------	------	------

舞台配置図



客 席

表示記号一覧	一 箏	= 17絛	+ 三絛	0 尺八	≠ 他楽器	* マイク	□ モニター	□ 毛氈	W 屏風
立 奏	立奏台	大 台	小 台	椅子	大 台	小 台	譜面台	台	ハイター 枚
座 奏	琴台	台	見台	台	山台	録音 有：無	録画 有：無	他	
始	緞帳：暗転	板付	毛氈 緋：紺	音響					
終	緞帳：暗転	板付	屏風 金：銀	照明					

<b>調絛表</b>	ピッチ A=44	編成：ソ□A	ソ□B	群 1	群 2
三絛ソ□A		<b>C# G# C#</b>		二上がり	
三絛ソ□B		<b>C# G# C#</b>		同	
三絛群 1		<b>C# G# C#</b>		駒位置移動	箏爪使用
三絛群 2		<b>G# C# G#</b>			

編成欄には面数を記入 開始調絛は太字 転調は上下の欄 ハーモニックスは右肩に○

作曲年 1991年 委嘱者 沢井忠夫合奏団 構成 三絛 | 独奏・|| 独奏・三絛 | 群・|| 群

時間 9分 出版楽譜 無し

解説 江戸の頃、琉球より伝わった三絛は、その奏法が解らないまま琵琶法師達によって、いろいろに工夫、改良され演奏されたという。演奏には始め琵琶の撥が使用された為、現在の三絛の撥は琵琶のそれと非常によく似た型をしていて大きい。そして人々の音への求心は尽きることなく、その様々な感性和相まって優れた楽器、優れた音楽へと発展してきた。しかしその殆どが語り物及び歌曲を中心とした発展の仕方であった為、楽器としてはもっと開発されている部分が、まだ多少残っている気がしないでもない。この曲では合奏群が大きく重い撥のかわりに箏爪を使用している。そして低音の響きと高音の華麗な音色を同時に得ようとして駒を胴の中央に置き、駒の外側を通常使用している側の2オクターヴ上に調弦して、その部分も含めて演奏出来るようにしている。その昔琵琶の撥ではなく、始めに箏爪が使用されていたとしたら、三絛は随分違った楽器として現在我々の前に存在しているかもしれない。そんな可笑しい想像が、ふと頭の中を過った。1991年5月作曲。[作曲者]

収録媒体 沢井忠夫 三絛の軌跡 (GOCJ-31121/2)